

スモン患者におけるCOVID-19 感染拡大の影響 – 第2回調査 –

野田成哉^{1)2)†} 勝野雅央²⁾ 南山 誠¹⁾ 久留 聡¹⁾

IRYO Vol. 77 No. 6 (429–434) 2023

要旨

スモン (Subacute myelo-optico-neuropathy ; SMON) 患者におけるCOVID-19 (coronavirus disease 2019) 感染拡大の影響についてアンケート調査を行った。2022年6月に、全国の938人のスモン患者にアンケート用紙を送付した。2022年7月から8月の間に445人 (回収率47.4%) のスモン患者から返送があり、解析を行った。445人 (男性121人, 女性324人) の平均年齢は 83.6 ± 7.7 歳で、65歳未満は3人であった。感染拡大の影響により、27.2%がスモン検診方法に変化ありと回答した。COVID-19に感染したスモン患者は12人 (2.7%) であった。また、COVID-19感染拡大の影響あったと回答したスモン患者の割合は、診療18.9%、在宅サービス8.5%、日常生活40.9%、何らかの支援10.1%、健康状態の変化36.2%であった。その例として、診療制限、面会制限、痛み悪化、感覚障害悪化などがあった。COVID-19ワクチンは、89.0%が1回以上接種しており、82.7%で3回以上接種していた。本調査の結果、スモン患者はCOVID-19感染拡大の影響を強く受けていると考えられた。

キーワード スモン, COVID-19, アンケート, 検診, COVID-19ワクチン

はじめに

スモン (Subacute myelo-optico-neuropathy ; SMON) は、1950–60年代にかけて、日本で多発した神経疾患である。腹部症状が先行し、下肢の痙性麻痺、異常知覚、感覚障害をきたし、視力障害をともなう。原因が整腸剤キノホルムであることが判明した1970年以降、新規発生はない¹⁾。その後、スモン患者による国と製薬会社を相手にした訴訟がおこ

り、恒久対策として、原因追及と治療法開発、検診等で予後追跡と健康管理を行うことになった。検診事業は「スモンに関する調査研究班」で行われている¹⁾。全国の患者は1970年に約11,000人であったが、徐々に減少し、2002年で約3,000人、2020年で約1,000人となっている¹⁾²⁾。

2019年末から、COVID-19 (coronavirus disease 2019) 感染が拡大し、世の中の生活が大きく変化した³⁾。高齢者や基礎疾患のある患者は、感染により

1) 国立病院機構鈴鹿病院 脳神経内科 2) 名古屋大学 神経内科学 †医師
著者連絡先：野田成哉 国立病院機構鈴鹿病院 脳神経内科 第二脳神経内科医長
〒513-8501 三重県鈴鹿市加佐登3-2-1
e-mail : seiya.noda.0903@qc.commufa.jp
(2023年4月7日受付 2023年8月4日受理)

A Second Survey on the Impact of the Coronavirus Disease 2019 Pandemic on Patients with Subacute Myelo-optico-neuropathy

Seiya Noda¹⁾²⁾, Masahisa Katsuno²⁾, Makoto Minamiyama¹⁾ and Satoshi Kuru¹⁾

1) Department of Neurology, NHO Suzuka Hospital, Japan

2) Department of Neurology, Nagoya University Graduate School of Medicine, Japan

(Received Apr. 7, 2023, Accepted Aug. 4, 2023)

Key words : SMON, COVID-19, questionnaire, check-up, COVID-19 vaccine